

年末年始の遊びいろいろ

クリスマス、^{おおみそか}大晦日、お正月と、年末年始は子どもたちにとって楽しい冬のひとときです。

クリスマスにはサンタクロースからのプレゼントを心待ちにして、なかなか寝られません。大晦日は年越しそばを味わいながら夜遅くまで起きて、除夜の鐘をついたり、神社にお参りに行ったり、初日の出を拝みに行ったり…。元旦の楽しみはお雑煮、そして何といたってもお年玉でしょう。「あけましておめでとう」のあいさつを交わしながら、^{しんせき}親戚一同集まって、普段なかなか会えないいとこたちと、にぎやかに過ごします。

寒いながらも一年の終わりと始まりを迎えるこの時期には、^{かるた}歌留多、^{ふくわら}福笑い、^{すごろく}双六、^{たこあ}凧揚げ、^{はね}羽根つき、^{こま}独楽まわしなど、むかしからさまざまな子どもの遊びがありました。

すごろく 双六

今では大きめの紙に区画と進む順が描かれ、さいころを振って遊ぶ絵双六が一般的ですが、もともとは古代エジプトやインドで始まったとされる^{ばん}盤双六が原型です。日本に伝わったのはかなり古く、奈良の^{しょうそういん}正倉院には8世紀頃の盤双六「^{もくがし たんすごろくきよく}木画紫檀双六局」が保存されています。^{ゆうぎばん}遊戯盤といわれる盤の上で駒とサイコロを使って2人で対戦する、どちらかというとな大人向けの遊びでした。

絵双六は江戸時代初期に始まり、後期には浮世絵師により、役者の^{にがえ}似顔絵や当時の風俗を^{いろあざ}色鮮やかに描いたものが制作されました。

昭和50年代頃までは、双六といえば子ども向け雑誌の付録には年に一度は必ずついてくるほど人気の遊び道具で、友だちどうしサイコロを振って、上がり（ゴール）を目指して盛んに遊んだものでした。



少女競技双六

雑誌「少女世界」第18巻第1号 大正12年1月1日発行

岡崎むかし館蔵

たこあ 凧揚げ

竹ひごをいろいろな形に骨組みとして組んで、そこに紙を貼り、たこ糸をつけて空に飛ばして遊びます。

東南アジアや東アジアに起源を持ち、日本には平安時代以前に中国から伝わったそうです。もとは「^{しえん}紙鳶」と呼んだようですが、「たこ」以外に、関西では「いか」、中国地方では「たつ」、群馬では「たか」、長崎では「はた」などと呼ばれます。

江戸時代初期に^{かみがた}上方で流行したのが江戸にも伝わり、各地域に広まっていくなかで、大きさもデザインもさまざまな、郷土色豊かなものが生まれました。

男の子の正月の遊びというイメージが強いですが、^{はつせつく}初節供の祝い、^{ほうさくきん}豊作祈願などの意味を込めて凧揚げする伝統を持つ地域があります。また地域によって凧を揚げる季節が異なります。関東では正月頃、関西では4・5月、中国地方では6・7月頃、いずれもその地域の風の強い時期と重なっているようです。



和凧（角凧）

武者絵「太閤と清正」

岡崎むかし館蔵